



全日本語りネットワーク

〒376-0045 群馬県桐生市末広町5-19
桐生市市民活動推進センター 内
Fax 0277-47-4066 振替 00130-2-114808
E-mail Japankatarinet@aol.com
<http://members.aol.com/Japankatarinet/>

ニュース

全日本語りネットワークと昔話の聞き手

寺内重夫

北ドイツの女乞食（語り手）の話を本にまとめた学者（聞き手）がのちにその女乞食の行方を尋ねたら、女乞食は放浪のすえ、山小屋で凍え死んでいた。そのとき学者は、自分はこのおばあさんから吸収するだけいろんな話を聞き、本にまとめることができた、しかし自分（聞き手）はこの死者（語り手）を前にして何もしてあげることができなかつたと、痛烈な述懐をしたという。＜瀬川拓男：著『民話＝変身と抵抗の世界』（一声社）236頁参照＞

「村のお年寄りが心のなかにしまっていた話を『採集する』ということは、妥当な表現と思えない。…心のなかにしまっているものを『採集する』という発想はやめにしよう。」

＜柳田国男：著『日本の昔話』（新潮文庫）小沢俊夫：解説＞

いずれも、語り手を“昔話を集める対象”としてしか考えていなかった聞き手の自戒と、語り手への思いやりの言葉であろう。

しかし、昔話の語り手と聞き手の周辺は変わった。語り手は“村のお年寄り”（伝承の語り手）ばかりではなく、採話された文字化された昔話を覚えて語る“都市の語り手”（書承の語り手）も生まれた。聞き手も、昔話を集める聞き手ばかりではなく、昔話を純粹に聞いて楽しむ聞き手も生まれた。

保育園児（5歳）に“魚も人と同じ家族があるのに、人が魚を捕らえ、焼き、煮、揚げて食べる中国の昔話”を語ったら、女の子が立ち上がって、わたしに「いい話だねえ。」と言った。生き物が生きるために食べるその矛盾と生命の重さをついたこの昔話に無意識に反応したのだろうか。だが、わたし（語り手）はこの女の子（聞き手）にとっさに応えることが出来なかった。語り手は聞き手なしには成り立たない。語り手は自らの語りを考えるばかりでなく、昔話を純粹に聞いて楽しむ聞き手にどう対応し、何ができるか、改めて考えてみてもいいのではないか。

その意味での全日本語りネットワークの役割とその活動に期待したい。

第8回全日本語りの祭り in 会津 申し込み期間 7月1日～31日迄